

はじめに

独立行政法人化となって1年半、学会で会う友人たちは皆一様に多忙化と先行きの不安を嘆く。大学の機能を研究・教育・行政の3本柱とすれば、教育と行政の「改革」に時間が奪われ、その分、明らかに研究時間の縮小にしわ寄せが生じている。研究のための改革はどれくらい進められたのであろうか。研究的にじっくり思考する機会が奪われる焦りと苛立ちが満ち、そして学会の不活発化を案ずる。そのうえ、「大学の先生方も忙しくて、あまり本を読まなくなっているようで、本も売れない」と嘆かれては、学生ばかりを責めていられない。

さて、この夏、オリンピック研究の関係で、「近代オリンピック前史の旅」として遅ればせながらギリシャ（ザッパス・オリンピックのアテネ）、イギリス（ドーヴァー・オリンピックのチップングカムデン、マッチウェンロック・オリンピックのマッチウェンロック）を訪ねた。それぞれのオリンピック研究は未だに貧弱だが、オリンピック研究体制の確立は着実である。2000年のシドニー大会も大学にオリンピック研究センターが設けられ、情報収集と研究推進の中心となっているし、ギリシャでも近現代オリンピック研究の体制確立は大きく進展した。そして2012年のロンドン大会へ向けてイギリスでも始動開始を実感した。（北京ではどうだろうか？）すべて研究組織・体制と予算が「確立」（一定程度）していた。現代のスポーツ研究はますます、集団的な体制とそこにおける個々人の確立との関係が問われてきているように思う。

本スポーツ科学研究室の「共同研究体制」も、およそ4半世紀を迎えることになった。集団的体制と個人の確立の在り方の思考のために1つの素材を提供するのではないか。

このような、自らの機関の研究（教育は別冊子）のまとめを出し続けている所もあまり無いのではないか。我々は、大学評価が指摘されるずっと以前から行ってきた。その点については大いにプライドを持っている。我々もまた多忙化の中にあるが、たゆまぬ研鑽を続けようと思う。

2005年9月16日

一橋大学スポーツ科学研究室室長 内海和雄